

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 38



2022 年度 感謝箱献金 お献げ先

「リグリマ・ジャパン」

「リグリマ」とは、バングラデシュの北部に住むキリスト教徒の少数民族、ガロの女性達「リグリマ バングラデシュ」と日本の支援グループ「リグリマ ジャパン」で設立されたガロ語の「団結、結束、協働」を意味するグループです。

ロシアによるウクライナ侵攻やコロナ禍で現地での食品インフレ率は 8, 93%と前年より約 3%も上昇し、ガロの人々の生活を直撃しています。そして、新型コロナ感染拡大によって多くの人が職を失い、都市に出稼ぎに行った人は農村に戻って農業を手伝っていますが、春先の洪水が引いたと思ったら、今度は日照りが続き、値の張る肥料を使ったにもかかわらず、干ばつで夏季米の収穫は期待できません。稲作に頼る農村部では収入がなければ子どもたちの進学をあきらめなくてはなりません。こんな中で、今年 4 月には、日本の婦人会の有志の方とリグリマ・バングラデシュのメンバーとの間をオンラインでつないで交流会を開きました。現地のメンバーは大変励まされたようで、また、会いたい、今度は収穫した野菜や作った衣服を見せたいと意気込んでいます。



農村部の干ばつ

「聖地ろうあ子どもの里」 HLID

(Holy Land institute for the Deaf)

聖公会中東エルサレム教区が、1964 年に宣教活動の拠点として設立したヨルダンの古都サルトにある教育施設です。現在の施設長は LuayHaddad 司祭です。宗教、国籍、民族に関係なく 3 歳から 18 歳までの聾啞者、重複障がい者を受け入れ、通常の学校教育を行う他、将来の自立のための職業訓練も行っています。2011 年のシリア内戦により隣国シリアから多数の難民を受け入れましたが、帰還が進まず難民キャンプの支援活動も行っています。日本では「HLID の子どもを支える会・日本」(代表・吉松さち子さん)が中心となり、支援を呼びかけています。感謝箱献金から吉松代表を通して献金をおささげしています。日本聖公会婦人会からの支援は、ヨルダン国内でこの活動に対する信頼と、エルサレム教区との交流を担っている面もあります。

ヨルダンでのコロナウィルス感染症の状況ですが、オミクロン株「BA5」が流行し、7 月中旬には急上昇し、ワクチン初回接種対象年齢も 12 歳に引き下げられました。こうした感染拡大は子ども達の学校教育を止める原因にもなっています。



サイディア・フラハ

サイディア・フラハとはスワヒリ語で「幸福の手助け」と言う意味です。

アフリカ・ケニアで、差別や極度の貧困に苦しむ子どもと女性のため福祉活動する NGO 団体です。親と死別したり養育を放棄された幼児、ハラスメントや虐待に苦しむ女子を、優先的に児童養護施設に保護し養育・教育しています。地域の子どもたちも通える小学校・中学校、なども立ち上げました。洋裁教室では弱い立場に置かれがちな女性の就労を助け自立・自活のお手伝いをしています。現地で活動する日本人運営者の荒川さんはじめ、東京のサイディア・フラハを支える会のスタッフの皆さんとも連絡をとりながら、顔の見える支援を続けています。昨年からは現地と日本をつなぐオンラインツアーも行われ、より顔の見える関係になってきました。その様子は日聖婦ホームページからご覧いただけます。

海外の支援先はロシアによるウクライナ侵攻の影響で各国小麦粉や原油などの価格が高騰した事を考慮し、支援を増額しました。

「国際子ども学校」 中部教区

日本に暮らすフィリピン人の子どもたちのための学校です。中部教区名古屋学生青年センターでは、1998 年に「国際子ども学校(ELCC)」を設立以来、名古屋市を中心とした地域に在住するフィリピンからの外国人労働者の子ども達への支援を続けています。

いろいろな事情から地域の学校に通うことが出来ない子どもたちのため、また、地域の学校に上るために必要な言語や社会性を身につける場所でもあります。毎日を安心して過ごせることによって、自分自身を大切に、将来を考えることができるように手助けし、さらにはアイデンティティーの形成時に必要な母国語の授業、フィリピン人同士の交流にも力を注いでいます。子どもたちとそのご家族の経済的不安や交流の不自由さを少しでも軽くできれば、と献金をお勧めし活動を応援しています。



難民・移住労働者問題キリスト教連絡会

横浜教区

難キ連は 1989 年、東南アジアからの難民船が西日本に漂着した際に難民に対する排外キャンペーンが起こったことに対して、聖公会、プロテスタント、カトリックの諸教派が難民救済の為に協働しようとして生まれた、日本でただひとつの教派を超えたエキュメニカルなキリスト教 NGO です。

以来、難民や外国人労働者の問題に取り組む、入管被収容者の訪問、仮放免生活をする人々への語学支援、生活相談、難民・移住者の問題キャンペーンのためのセミナーを実施しながら活動をしてきました。

2019 年からはこれまでの入管被収容者面会支援活動の縮小に伴い、在日外国人の子ども達の学習支援、居場所作りに着目し、難キ連の拠点となる日本キリスト教協議会(NCC)のフリースペースを会場として在日外国人の方々や子供たちの母国語と日本語などの学習会を行っています。また難民や外国人労働者の問題を共に考えるための学習会や講演会、難民支援コンサートなどのプログラムの企画や、こうした問題に取り組んでいるキリスト教の団体や個人を支援しています。

地域支援団体 釜石支援センター のぞみ 望 東北教区

2013 年に「被災者支援」から「地域支援」へと、3・11 東日本大震災後の地域コミュニティ作りを目指して設立された地域支援団体です。

震災後、だれでも気軽に立ち寄って話ができる「お茶っこサロン」を開設し、仮設住宅や復興住宅に住む人々、被災地に戻ってきた方々との新しいコミュニティ作りを目指して、地元市民・県外からのボランティアとともに活動してきました。

仮設住宅がなくなった後は、復興住宅の集会室、地域の集会室等 20 か所余りの会場で毎月、お料理、手芸、体操、季節の行事などのイベントを企画し実施、その他見守り、介護予防、相談事に応じる働きもありました。コロナ禍で 2 年間活動困難な状況が続きましたが、今年 5 月に再開されました。今もできる範囲で活動しています。コロナ禍で分断され関りが薄くなった部分の再構築を考えていく必要があります。「コミュニティは『生き者』のように変化する。関わる人々と信頼関係を築き、何かの時は助けになる距離を保ちながら共に歩むことが大切」、代表者の言葉です。



聖公会生野センター 大阪教区

1992 年、大阪の聖ガブリエル教会の復興と共に日本聖公会によって設立され、大阪生野にて日本人と在日韓国朝鮮人、健常者と障がい者が共に生きることを願い、地域の在日韓国人高齢者、精神障がい者の生活支援や様々な文化活動も行っています。また、日韓聖公会を中心とした交流を通して「社会の狭間で生きる人々と共に歩むこと」「地域と共に育つこと」を大切に、行政や他の団体ではカバーできていない事柄に目を向けて歩んできました。

在日一世、二世の方々が集まり昼食をとる場としての「のりばん」(「遊び場」の意)は母国語である韓国語でコミュニケーションをとれる場であり、故郷について語り合える場です。「クリンもだん美術教室」は、地域の方から「自分の子どもは絵を描くことが好きだが障がいを持っていることで受け入れてくれる美術教室がない」との声から「誰でも参加できる美術教室」として始まり、この働きはデイサービスへと続き、現在デイサービスには多様な人が集うようになりました。その他プール学院高校生をはじめとする生徒のボランティアの受け入れ、韓国語教室、落語会(こみち寄席)にいたるまで「地域が必要とする」働きを行なっています。

設立 30 周年にあたり、(高齢者、障がい者の生活介護事業)の新事業をたちあげて、今後に向けて新しい歩みを開始しようとしています。

『感謝箱献金ハンドブック 2022』をご活用ください

今回の『ハンドブック 2022』はパンフレット形式です。130年目の感謝箱献金の活動が婦人会員の一人ひとりに理解され、さらに会員以外の方々にも広がることを願っています。

内側には2022年度の7つのお献げ先が紹介されています。「感謝箱献金」は国内外の生命や存在を危うくされている人々、特に女性や子どもたちの自立をめざす働きを祈りと献金で応援しています。お献げ先の方々の笑顔は、わたしたちが宣教の働きに参加する喜びであり、神さまへの感謝です。



全国の皆さまから2021年度にお届け頂いた感謝箱献金は約205万円でした。お献げ先については2022年度に改めて協議され、今年度は7団体にお届けすることが承認されました。次期(2022年)のお献げ先は、各教区婦人会、日聖婦人委員会及び感謝箱献金事務局より随時募集し、お献げ先を決めてまいります。

秋からの行事の折りに感謝箱献金をご紹介します。ハンドブック、感謝箱など必要な時は、いつでも感謝箱献金事務局にご連絡ください。

日本聖公会婦人会 HP をご活用ください。

◇「ハンドブック 2022」の内側、一番下の行の「...議案提出され 総会 で決議」は、2023年度は会長会でと訂正いたします。



感謝箱献金の祈り

神さま、
今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。
イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。
私たちにもそのイエスさまの歩みに倣(なら)う心をお与えください。
私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。
また、この人々との交わりを通して共に生きる者とならせてください。主イエス・キリストのみ名によって

アーメン

(2006年6月日本聖公会婦人会第21(定期)総会後第2回常議員会にて制定)

今号は「おとずれ」の中に紙面を頂きました。皆さまが祈りと感謝をもってお献げくださった献金がそれぞれの場で活かされていますことをお憶え頂き、今後とも「感謝箱献金」の働きをご理解、ご支援いただければ幸いです。

挿絵はサイディア・フラハ小学校1年生が描いた物を使わせていただきました



日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局
〒520-2331

滋賀県野洲市小篠原 847-6 井田涼子方

TEL/FAX 077-599-3728

E-mail kansyabako@gmail.com